

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- I 祝! 国際交流50年記念
 - ・ラボ国際交流50年の軌跡
 - ・Golden Moments: 50years of Global Connections and Lasting Impact
- 3 地平線白書 2024夏のラボ国際交流
 - ・北米交流, ニューージーランド交流, オレゴン国際キャンプ, 韓国交流
 - ・受入れプログラム
- 7 東京言語研究所 教師のためのことばセミナー
～学校国文法と学校英文法: その構造と教育のあり方
理事会・評議員会報告
- 8 10代とともに ～続けているのは好きだから
- II Go Ahead! ～向 敦史氏
Information



11月13日～16日にアメリカ・アリゾナ州で開催された Annual Coordinator Conference。各州の4Hコーディネーターとともに国際交流50年を祝った。

祝！国際交流 50年記念

☆…1972年にアメリカ4Hとの間で始まったラボ国際交流は、コロナ禍による2年間の中断を経て、2023年に50回目を数えました。ラボ国際交流50年の軌跡を振り返ります。

理事長あいさつ

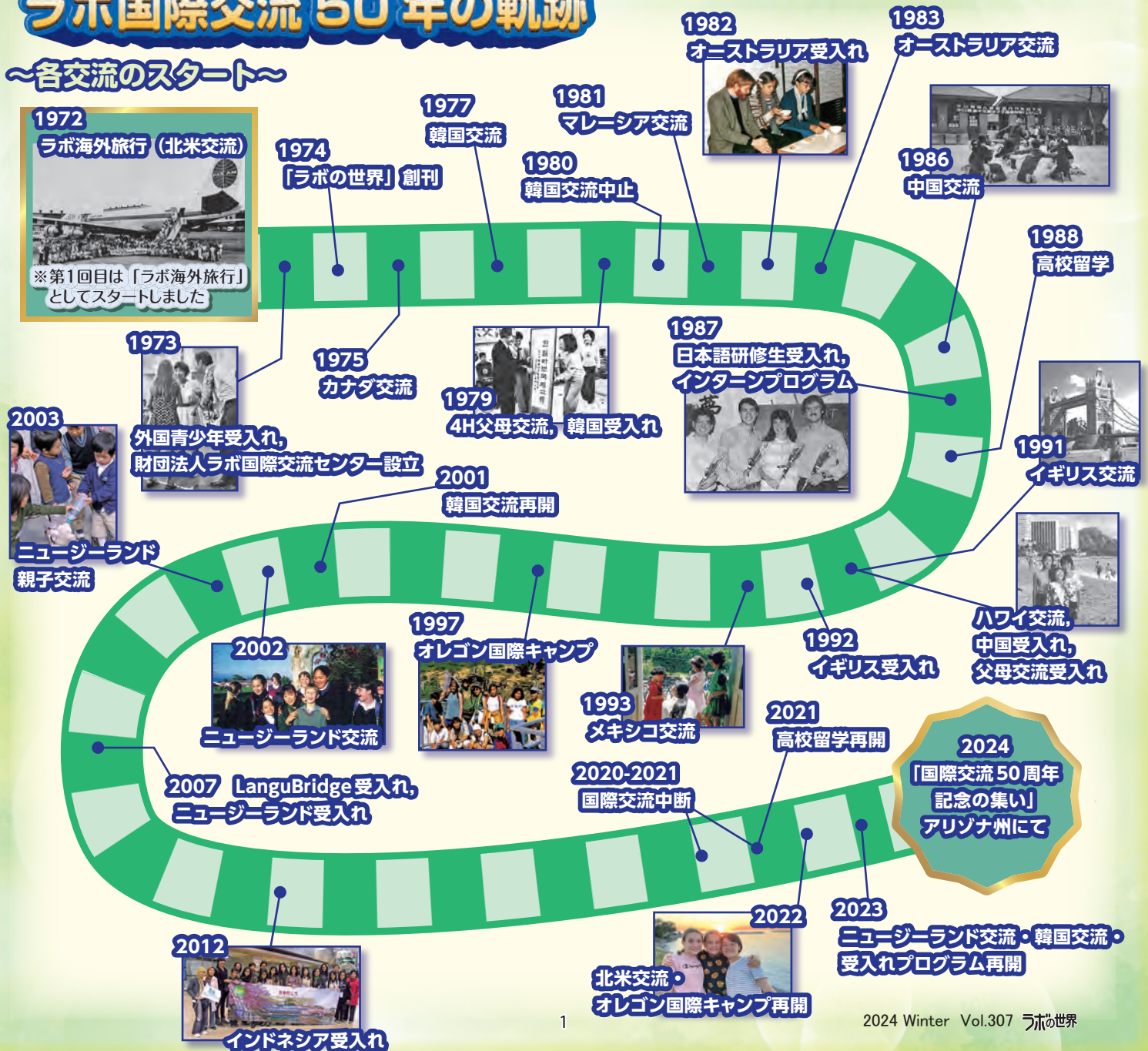


(一財)ラボ国際交流センター 理事長 林 浩司

ワシントンとアイダホの2つの州からはじまったアメリカ4Hとのホームステイ交流は、今では多くの子どもたちの夢をはぐくむかけがえのないプログラムとなっています。異文化にふれ、友情をはぐくみ、そして大きく成長していく子どもの姿は、私たちの最大の喜びです。この50年間、活動を支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。これからも、子どもたちが世界に羽ばたくための力となるよう、努力を続けてまいります。

ラボ国際交流 50年の軌跡

～各交流のスタート～





Golden Moments: 50 years of Global Connections and Lasting Impact

11月13日～16日に、国際交流50年を記念したAnnual Coordinator ConferenceがStates' 4-H International Programs主催でアメリカ・アリゾナ州にて開催されました。4Hの各州コーディネーターのほか、世界の各交流団体（日本、韓国、台湾、アルゼンチン）から、総勢80名がつどいました。ラボ国際交流センターからは、財団普通会员のラボ・チューター17名、理事長ほか6名が参加しました。

プログラム

11/13

- Historical Display
- Opening Ceremony
- Welcome Dinner



11/14

- General Session
- Historical Panel
- International Partner Presentations
- Breakout Workshop Sessions
- 50th Anniversary Gala Dinner

11/15

- Placement Workshop
- Local Tour
- Silent Auction
- Culture Fair Night

11/16

- Departure

合同会議報告

Conferenceに先立ち、11月13日、States' 4-H International Programs (S4-H) との合同会議が開催され、S4-HのBoard Member (理事) 8名、S4-Hスタッフ4名、ラボ事務局6名が出席。今夏の振り返りと、2025年にむけて意見交換が行なわれました。青少年教育プログラムとしての国際交流の重要性に鑑み、今後も共同してプログラムを維持、発展させていくことを確認しました。

Breakout Workshop Sessions 紹介

How seeing life from another perspective leads to world peace!

各交流団体からのワークショップの時間。ラボからは、日米の子どもをとりまく環境を比較するプレゼンテーションをしました。また、2024年の交流事例を紹介しながら、国際交流プログラムはラボの参加者だけでなく、4Hの受け入れ家庭にとっても価値のある体験であることを伝えました。



日本の給食準備を疑似体験してもらい、自立を促すアメリカに対して、協力することを意識する日本の子育てを対比した



General Sessionで50年の歴史を振り返った



Welcome Dinnerは、国際交流が始まった1970年代ふうのファッションで



「紙、布、食」をとおして日本文化を紹介

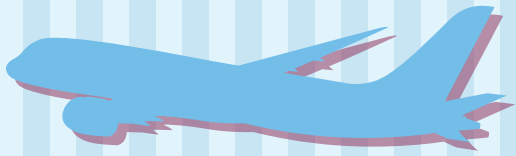
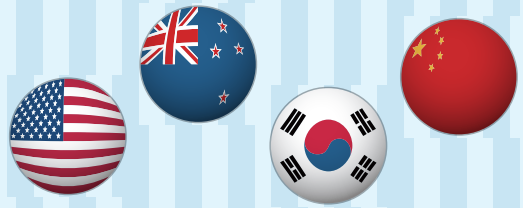


ノースカロライナ州に留学中のラボ高校留学生から、留学生生活を通して考えたことをスピーチ



地平線白書

2024 夏のラボ国際交流



今夏の国際交流プログラムには、訪問プログラムに499名、受入れプログラムに総勢78名が参加しました。この夏の体験を、8名の参加者にレポートしていただきます。

北米交流



気持ちを伝えるたいせつさ

森脇愛心 (中3 / 愛知県・加藤純代P)

訪問先：アメリカ・ニューヨーク州



はじめて会ったとき、ホストは内気で何も話さず、これから始まる1か月を楽しく過ごせるのか不安でいっぱいでした。5日目、ホストが裏庭でテントを立ててキャンプをしようと提案してくれました。テントの中で、好きなテレビ番組や趣味について、気がつけば夜中の3時まで語りあっていました。その時間が私たちの距離を一気に縮めてくれました。それ以来、ホストとは1日1回は爆笑しあえるようになりました。

また、Momに失礼になるかもと、すべてに“Yes”と答えて、自分を出すことができずにいると、「本当にやりたいことを言えているかMomが心配に思っている」と引率者から聞き、自分の気持ちを伝えることがたいせつだと気づきました。

お姉ちゃんや弟ともすぐにうちとけ、一緒に遊びながら過ごす時間が増えていきました。ある日、Momが私たちを見て「本当のきょうだいたい」と言ってくれ、本当の家族になれた気がしました。

ホームステイでは、不安を恐れずにどんなことにも挑戦する姿勢と、自分を出すことがだいじだと思います。この夏、私は人生で最高の経験をしました！

裏庭の池でボートに乗った。たくさん水をかけあって、たくさん笑って、仲がすごく深まった



4Hのフェアのお手伝い。モールメガネを作りあった

●参加前と変わったところ

自分はいまアメリカでたくさんの方にチャレンジしているんだと、自信がついた。

ニューヨークシティに遊びに行ったときの、きょうだみんなでの写真。たくさん笑った



親子2世代の交流体験

国際交流50年を記念して、愛心さんのお母様にも、30年前に参加したラボ国際交流の思い出をうかがいました。

森脇佳美様 (保護者) 1994年アメリカ・オレゴン州参加

私がラボ国際交流に参加したのは中学1年生の夏。ホストとはすぐに仲良くなり、トランポリンの上で一晩過ごしたり、馬に乗ったり、キャンプに行ったり、心が躍るような日々でした。「帰りたくない、もっと一緒にいたい」と別れたあの瞬間は、いまでも心に深く刻まれています。時代の変化とともに、文通、Eメール、SNSと交流の手段は変わりましたが、友情はいまも続いています。この交流を通じて世界が広がり、人と人のつながりのたいせつさを学んだと思っています。

今回、娘がどんな体験をして帰ってくるのか楽しみでした。ホームシックを持ち前の明るさと前向きさで乗り越え、すばらしい日々を過ごすことができました。たくさん思い出を楽しそうに話し、いまでも連絡をしている姿を見て、ホームステイに送りだして良かったと感じました。この体験が将来にむけて大きな財産となったと確信しています。



おみやげの練り餡を作っているところ。私が持っていったおみやげに興味をもってくれ、喜んでくれました

留学とホームステイの両方を経験

伊藤 駿 (中2 / 北海道・三坂桂子P)

訪問先：タウランガ



ホストファミリーに折り紙を教えた。日本料理を作ったら大喜びしてくれて、うれしかった



ぼくは北海道生まれですが、アイヌ民族の文化をあまり知りません。ニュージーランドでは子どももハカを歌って踊れることに驚きました。自国の文化を愛していることがよくわかりました。

学校では日本語の授業で教える役割をしましたが、英語ができないと日本語もうまく教えられないのだと思いました。授業でインスタントの味噌汁を作ったら、みんなは味噌の見た目に険しい表情をしていました。それでも飲んだ後はおいしいと言っていました。

ぼくのスクールバディはどちらかというとなりかたではなく、むこうからあまり話しかけてきませんでした。なので自己紹介アルバムを見せたり、がむしゃらに話しかけてみました。午前中にモーニングティーといって、おやつを食べる短い休み時間があり、その時間にバレーボール、クリケット、ラグビーに混ぜてもらい、一緒に楽しんでいたら友だちが増えました。

今年の夏は今までいちばん充実していて、最高の思い出ができました。

●学校の思い出

はじめは Google 翻訳をつかわれることが多く、話のリズムがつかれなかった。でも学校最後の日、Google 翻訳をつかったのは友だちが「ありがとう」の音声を流したことのみだった。



仲良くなった仲間たち。またみんなと絶対に会いたい!!



スクールバディと。最初はうまく話せなかったけど、スポーツやアニメが会話をつなげてくれた

●発見したこと

だいじなのは英語力じゃなくて伝える気持ち。英語をうまく伝えられないときに、自己紹介アルバムを何度もつけた。

オレゴン国際キャンプ

キャンプで築く人間関係

見澤 瞳 (高1 / 茨城県・田口好子P)

訪問先：アメリカ・オレゴン州、カリフォルニア州



80L 入るリュック。これで空港を移動するのはたいへんだった



●英語でしゃべること

最初は正しい英語かどうかばかり気にしていた。でも、寝る前にアンバサダーが日本語で「おやすみ」と言ってくれたとき、教えたことを覚えていてくれたことがうれしかったし、自分の国のことばをしゃべってくれるだけで安心できることを実感した。アンバサダーも同じだろうと思ったら、それからは「正しい英語」は気にせずコミュニケーションをとれるようになった。

森のなかで大きな切り株の上に立ったとき、満点の星空の下で眠ったとき、砂漠にはえているヒマワリと目が合ったとき……どこまでも広がる空間を享受していると、自分はふだん狭い世界で生きていると感じました。

キャンプを通して、あらためてたいせつだと思ったのは人間関係についてです。一緒に旅をする仲間も、3週間も一緒にいれば衝突することがあります。腹をわって根気強く話しあってみると、すれ違う前よりも仲良くなれました。引率者が「日本人同士でも立派な異文化交流だよ」と言っていたのが印象に残っています。

●参加前と変わったところ

自分の気持ちをことばにすることが少しくまくなった。アンバサダーやカウンセラーは、自分の言いたいことを述べているのに、相手を傷つけない言い方ができてかっこいいな—と思った。マネしているうちに、少しそれが身についた気がする。

アンバサダー（現地の参加者）と別れるときは寂しかったです。でも、遠くにも友だちがいると思うと、また広い世界を感じられるし、ひとりじゃないと思えます。はじめてのことに挑戦するには勇気があるけど、キャンプでは後押ししてくれる友だちがまわりにいます。この先もずっとキャンプで築いた人間関係をたいせつにして、この体験を糧に新しいことに挑戦していきたいです。



浜辺の昆布で縄跳び。私たちはその場にあるもので遊ぶ能力に長けている



キャンプ参加者みんなで大きな切り株の上に乗った

自分に自信がついた

岡 愛莉 (高2 / 徳島県・横田由佳子 P)

訪問先: ソウル



ホストと BTS の手形合わせ。明洞での買い物は楽しかったぞ!

私は K-POP が好きで、韓国にも興味があったので参加しました。コミュニケーションに不安がありましたが、ホストが英語を話せたので英語と韓国語で会話をしました。ホストと一緒に夜中まで韓国ドラマを見るのが楽しかったです。私の希望をいろいろと聞いてくれたホストファミリーに感謝しています。

お別れのとき。寂しかったけど、韓国で過ごした10日間は最高の思い出になった

韓国ラボのキャンプに参加して、韓国の子と一緒に SADA をして友だちもできました。また、ホストの通ってるラボ・パーティでは、韓国の伝統遊びや SADA をしました。



いちばん嬉しかったことは、持っていった日本のお菓子やインスタントの味噌汁、文房具などをとても喜んでくれたことです。「柿の種」がホストのいちばん好きなお菓子で一緒に食べました。においつきの消しゴムは、ホストが勉強するときに喜んで使ってくれました。

●会話できるって楽しい
ホストやお母さんが話しかけてくれて、自分からも話せるようになって、会話をすることが楽しかったです。英語や韓国語を使って会話するのが楽しいことを発見できたし、自分でも会話することができると自信もつきました。

応援してくれたみんなのおかげで、この交流は私にとって有意義な時間になりました。挑戦したことで自分に自信ができました。国際交流を迷ってる人は、ぜひチャレンジしてください。



ホストファミリーと対面。ドキドキとワクワクでいっぱい

受入れプログラム

6月から8月にかけて、総勢 78 名がアメリカ、カナダ、韓国、中国から来日。今夏は中国との交流が5年ぶりに再開、北京市月壇中学から11名が来日しました。

日本語研修生受入れ

いっぱい遊んでくれた

大野颯之助 (小1 / 千葉県・小池安奈 P)



Micah は朝早く起きて日本語の勉強をしていたし、電車でも日本語をがんばって勉強していた。ぼくは英語はあまり知らないけど、知っていることばは使ってみた。たくさんひらがなを教えてあげた。

Micah はいっぱい遊んでくれた。家でかくれんぼをしたときは、背が高いからすぐ見つかるかと思ったら、ドアの隙間に挟まってじょうずに隠れていて、なかなか見つからなかった。

家族でお寿司屋さんに行ったとき、「Micah」と「真イカ」の発音が同じことをお父さんが教えたら、Micah の LINE のアイコンが「真イカ」になった。

「ごちそうさま」が難しかったので、日本語チェックをしてあげた。最後には100点をあげた

Micah が Mom 直伝のチキンとアメリカ国旗のフラッグケーキを作ってくれた。世界一おいしいチキンだった。



スバリゾートハワイアンスに行った。プールで潜ったり、水をかけあったり、フラダンスを見て、ピザを食べたのも楽しかった

家族より

もともと異文化に興味があり、幼い頃のほうが感性も柔軟で受け入れやすいと思い、受入れを決めました。国が異なっているけど、一緒に住んでいてまったく違和感なく、家族がひとり増えた感じで過ごせました。特別なお出掛けが多かったわけではありませんが、みんなが寝る時間まで同じ部屋で過ごして、たくさんコミュニケーションをとったことが良い思い出です。

北米青少年受入れ

山登りはたいへんだったけど、みんなで登りきった



観光ではできないホームステイの魅力

平野伶奈 (中2 / 佐賀県・三根利恵子P)



Camden はソフトボール部でも、テニス部でも、バスケットボール部でもあり、テニスをするとサーブがとてもじょうずでした。

英語で「通じるかな?」と思ったら、Camden が察して「〇〇?」と聞きかえしてくれて、私は「そうそう」としかこたえられない場面も多く、それでもがんばってジェスチャーやアイコンタクトを使って、なんとか伝わるように努力しました。話すのは苦手だったけど、聞きとるのは少しくいだったから、そこはよかったなと思いました。

Camden とは、夜たくさんしゃべりました。その日の感想や、明日の予定を話しあったり、Camden の好きなホラーゲームや、韓国のアイドルグループの話の聞いたり、お菓子パーティをしました。一緒にいて楽しかったです。

家族より

子どもたちはきょうだいが増えて嬉しそうだったり、人と関わる楽しさや難しさを感じたり、いい経験になりました。たいせつな友だち、家族が海の向こうにいるということは、子どもたちに大きな影響を与えてくれたと思いますし、観光ではできないホームステイの魅力をあらためて感じました。また会いたいと思う気持ちが次につながってくれると思っています。家族でできる国際交流、おすすめです☆



Camden の大好きな「ごはん」。集中して書きあげた

韓国青少年受入れ

新しいことにチャレンジできる機会

馬場俊丞 (中2 / 山口県・吉兼和恵P)



もともとはじめて会った人に無口なぼくは、仲良くなれるか心配でした。しかしユンソクは日本語がじょうずで、英語で話そうと思っていたぼくはとても驚きました。そのことがきっかけで聞きたいことがたくさん出てきたので、ぼくからも積極的に話しかけました。ラボキャンプではもっと新しいことをやってみたいと思うようになり、ユンソクと一緒に「キャンプ盛りあげ隊」をやったりしました。いちばんの思い出はみんなと一緒に家で映画をみたり花火をしたことです。韓国ラボのキャンプに誘われているので、行ってみたいです。

受入れはぼくにとって新しいことにチャレンジできる機会でした。来年は北米交流に参加予定なので、そこでもぼくが変われる機会になればいいと思います。



キャンプ帰りの弟をお迎えに行った流れで弁天池に。みんなの距離もぐっと近づいていた

家族より

家族で国際交流をしたいという思いをずっと抱いてきました。日本語が堪能で、誰に対しても優しく接してくれるユンソク。多くを語りあわなくても、一緒に過ごす時間がふたりの絆をつくっていくように思われました。ダンサーになりたいという夢を描き、まっすぐ進んでいくユンソクの姿に、私たち家族も感銘を受けました。家族がひとり増えたことを嬉しく思います。「韓国ラボのキャンプでユンソクと再会する」という、俊丞の新たな夢をつくってくれてありがとう。

中国青少年受入れ

自分の感じたことをことばにする

池田羽菜 (高2 / 埼玉県・四元佳奈子P)



日本で楽しい体験してもらえたらいいなと受入れを決めました。曾瞳さんは日本語がとてもじょうずで、たくさん話をしました。日本では高級なイメージのあるメロンは、中国ではとても安いのだとか。中国料理をふるまってくれたとき、辛さにびっくりしました。家ではさらにスパイスで辛く味つけして食べるそうです。

パワフルで明るい彼女と交流して思ったのが、まっすぐに自分の考えを伝えることのたいせつさです。「おいしい」「やってみたい!」など、自分の感じたことをことばにして表現する彼女はなんてすてきなだろうと思いました。それを母国語でない言語でやるのは大変な努力がいるだろうし、勇気もいることだと思います。自分の芯をもちながら、異文化の体験を全身で楽しんでいる姿は本当にかっこいいなと感じました。自分もそういった強さをもった人になりたいなと思いました。

いつか中国に来てね! と言ってくれたので、必ず会いに行きたいです。

家族より

「私はいままで日本語を一生懸命勉強しました」とすなおにことばにできる曾瞳さんはとても輝いていました。4泊5日の短い時間をお互いに充分に楽しみ、再会を誓いあいました。



「水族館に行きたい!」とのことで葛西臨海水族館へ



熊野神社で妹が手水作法を教えているところ



学校国文法と学校英文法 ：その構造と教育のあり方

森 篤嗣 武庫川女子大学教授。兵庫教育大学学校教育学部卒業。大阪外国語大学言語社会研究科博士後期課程修了。博士（言語文化学）。チュラロンコン大学講師，実践女子大学助教，国立国語研究所助教・准教授，帝塚山大学准教授・教授，京都外国語大学教授を経て現職。光村図書出版小学校国語及び英語編集委員，日本語教育学会調査研究推進委員会副委員長，関西言語学会大会委員会副委員長など。2015年度日本語教育学会奨励賞受賞。2017年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金第1段審査委員表彰。日本語教育，日本語学，国語科教育など幅広い研究分野に興味関心がある。

本講義では，学校国文法と学校英文法の経緯と現状の確認からはじめ，「主語」「目的語」「活用」「ヴォイス」「テンス」「アスペクト」「連体修飾部（関係詞節）」というトピックごとに構造の比較を通して，教育のあり方について考えるための土台となる情報を示しました。

学校国文法については，助動詞をはじめとした品詞に意味を押しつけがちです。そのため，文の構造を考える授業に結びついておらず，日本語の構造理解の多くは英語科で実現されているのが現状です。学校国文法を変えるというよりも，学校国文法を乗り越えて文の構造の教育をする機会を増やし，「言語の教育」を

目指していただくのが最善かと伝えました。

学校英文法については，授業において対象言語である英語を中心に扱うのはもちろんですが，学校国文法だけでなく日本語学を含めた日本語の構造についても理解を深め，母語である日本語との対比を有効に活用しながら英語の教育にあたっていただければと伝えました。

受講者自身がそれぞれの立場で，学校国文法と学校英文法両者の新たな展開を考え，「ことばの教育」を実行していただくことを期待したいと伝えて結びとしました。

2021年からは「教師のためのことばセミナー」として，教師を主たる対象として理論言語学の考え方や方法を講義とディスカッションを交えた形式で解説する企画を始めました。今年度は「ことばへの気づき」の対象となる言語知識やその獲得・使用などについての講義に加え，話題沸騰の生成AIと言語教育との関連についての講義を2つ組みこむことにしました。小・中・高・大の先生以外にも，教員志望者，社会人など，いろいろな背景をもつ方々にむけ，わかりやすく解説しています。

一般財団法人ラボ国際交流センター 理事会・評議員会報告

第53期上半期事業報告を主たる議題とする理事会と評議員会の合同会議が，11月19日（火）に，理事10名中10名，評議員10名中9名が参加し，対面とオンライン併用で開催されました。今夏実施の諸外国訪問プログラム，また5年ぶりに再開した

中国・北京市月壇中学との交流を含めた諸外国の受入れプログラムのようすが，写真を交えて報告されました。また，定款について，会員の承認，役員職務執行報告など，全議案が異議なく承認されました。

10代とともに

中村 昇

Noboru Nakamura

長崎県佐世保市生まれ。中央大学文学部教授。一般財団法人ラボ国際交流センター評議員。専門は現代西洋哲学で、ルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ウィトゲンシュタイン、アンリ=ルイ・ベルクソン、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、西田幾多郎、ルドルフ・シュタイナーなどを研究。著書に『いかにしてわたしは哲学にのめりこんだのか』（春秋社）『小林秀雄とウィトゲンシュタイン』（春風社）『ホワイトヘッドの哲学』（講談社）『ウィトゲンシュタイン ネットタイをしない哲学者』（白水社）『ベルクソン= 時間と空間の哲学』（講談社）『ウィトゲンシュタイン『哲学探究』入門』（教育評論社）など多数。



続けているのは好きだから

幼いころから、この世界がふしぎでふしぎで仕方ありませんでした。

幼稚園に入園するころに、自分の病気や他人の死などを通じて、「人間はいずれ死んでしまう」ということに気がつきました。そして、いずれはかならず死んでしまうのに「なぜおとなたちは平然と生活しているんだろう？」と疑問に思っただけです。おとなたちが、生きていることに「まるで意味があるように」暮らしているのはなぜだろうと思ったわけですね。ちなみにみなさんは、人生の意味はわかりますか？ 難しい質問ですよ。

幼いころの私は、そのうちにおとなが目の前にやってきて、人生の意味や、人はなぜ生まれてなぜ死んでいくのか、そして死後はどうなるのかを教えてくださいました。ところが中学生になっても誰も教えてはくれませんでした。なので、そのころからいろいろな本を読みはじめました。私は中学生のころから親元を離れ、下宿で暮らしていたので、部屋ではひとりきりだったんですね。そのため本ばかり読んでいた記憶があります。まず読んだのは小説でした。小説家って、一風変わっている人という印象があったので、私の疑問に答えてくれるような気がしたんです。太

今回お話をうかがったのは、哲学者の中村 昇さん。落語、将棋、万年筆など、多彩な趣味をおもちで、学生時代には演劇もされていたそう。経験豊かな中村さんが、世界の誕生にまつわる大きな疑問から、日々の生活のなかにある些細な疑問まで、さまざまなお話をしてくれました。

宰 治、三島由紀夫、阿部公房、大江健三郎……とにかく毎日本を読みました。小説には、いろいろな感情がでてくるし、人生観にふれることができ、すごくおもしろかった。しかし、肝心の「死」についてとか、「生きる意味」の根本的なことについては教えてくれませんでした。

哲学との出会い

中学2年生のときに、小林秀雄という文芸評論家の本に出会います。彼の考えに惹かれ、本を読みすすめているうちに、「哲学者」という人たちが、私の考えていることと同じようなことを考えているらしいということを知ったんです。そこで、本のなかで引用されている哲学者、アンリ=ルイ・ベルクソンやアルトゥール・ショーペンハウアー、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェなどの本を読みはじめました。これらの哲学の本は、おもしろかった。私の疑問の答えに近づいているという感覚もありました。しかし、これらの本もやはり私の疑問の根本的な答えにはならないものでした。

ところが高校生になると、アルベール・カミュの『シーシュポスの神話』という哲学的なエッセイに出会い、哲学をやりたいと思うようになりました。シーシュ

ポスというのはギリシア神話の登場人物で、神々を欺いたために大きな岩を山の上へ運ぶが、山頂近くまで行くと、重みで岩がふもとまで転がってしまうので、また山の上に運ぶ、という罰を受けていました。カミュはこのことと、人間の状況が同じだということです。つまり、人生に意味などなく、不条理なのだ。私は「ああその通りだ」と思いました。私の疑問というのはやはり哲学なんだと確信したのです。

なんだかわからない感動

演劇にも興味をもちました。高校では、文芸部と演劇部に所属していました。高校を卒業してからは、演劇をやるために上京しました。東京の大学に通いながら、さまざまな公演を観にいきました。「紅テント」や「黒テント」、「天井桟敷」などの芝居をずっと観ていました。すごくおもしろくて、どこの劇団に所属しようかと考えていたとき、明治大学の学園祭で「大駱駝艦」の公演を観ました。その公演にもすごく感動しました。大駱駝艦の公演にセリフはなく、舞踏で表現するのですが、「これだ!」と思いました。すべてのことが一挙に達成されているような、ふしぎな感覚でした。「なんだかよくわか

10代とともに



らない感動」がありました。すぐに土方巽の「アスベスト館」に入門しました。私が出会った人のなかで、たったひとりの天才だと、いまでも思っている人物です。2年間そこで稽古を受けましたが、舞踏はここでやめることにしました。やはり幼いころからの疑問についてむきあいたかったんです。大学院で哲学を専攻し、本格的に哲学を学ぶことにしたんです。

このような経緯で、哲学の道に入りました。それからこの年齢になるまでずっと考えてきて、ある程度見えてきたものはありますが、「この世界はなぜ存在するのか」ということの答えは、わからないままです。哲学というのは、この問いに正面からむきあっていく学問なんですね。

哲学者の生活

朝から15時くらいまでは、たいてい哲学の本を読んでいます。午前中は、授業をしている大学院の演習に使う本を読んで、午後は自分の関心のある本を読んでいます。いまは、ルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ウィトゲンシュタインの『哲学探求』をドイツ語で、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの『過程と實在』を英語で、もう一冊はフランス語でベルクソンの『物質と記憶』を読んでいます。あとは、西田幾多郎の「私と汝」です。

演習にむけては、これらを何度も何度も読み返します。学生からどんな質問がくるかわからないので、徹底的に細かく読みこんでいくんです。また、本を書いていますので、執筆をしたりして過ごしています。なので、一日中机にむかって何かをしていますね。大学にいるときは研究室にいますが、そうでないときは、町の図書館でこれらのことをすることが多いです。図書館にいと、ほかの方も

調べものをしたり勉強したりなさっていますよね。そのふんいきが好きで、私も図書館にすることが多いです。みなさんラフな感じで過ごされていますが、私は集中して机にむかっているという感じですね。

言語がもっている「世界」

哲学と言語習得には、直接的な関係はありません。関係はないんですが、やはり西洋哲学を学ぼうとする際には、西洋の言語を習得する必要があると思っています。例えばウィトゲンシュタインの本を読むときに、日本語に翻訳されたものを読むのと、ドイツ語で書かれた原本を読むのとでは、理解度に差が出てくるんです。説明するのが難しいのですが、著者の細かいニュアンスが原本のほうがより伝わる感じがするんですよね。

言語には、それぞれの言語がもっている「世界」があります。ドイツ語にはドイツ語の世界、フランス語にはフランス語の世界、英語なら英語の世界。その世界にみずから入っていかないと、その言語で書いた哲学者の意図の、いちばん奥のところまでたどりつかないんです。翻訳されたものだけでいちばん奥までたどりつける人もなかにはいるのかもしれませんが、私にはそれはできません。

わかればわかるほど

日常生活を送っていると、ふしぎなことばかりです。昆虫ってなんであんな形なんだろう？ 植物って、じーっとして動かないけど、寂しくないのかな？ どちらも我々人間と同様に生きていっていることだけは理解できるけど……。これらはどこからやってきて、なんでこんなふうにして生きていっているんでしょうね？ 謎だらけです。

そして、これよりもっと私にはわからないことがあります。人間は細胞が集まってできていますよね。そして細胞をつくっているのは原子です。その原子をつくっているのがさまざまな素粒子なわけです。人間も、虫も植物も、構成要素としては、最小単位は素粒子になるわけですから、同じなんです。もっと言うと、机やパソコンなどの無生物も、素粒子からできているわけです。この宇宙には無数の生物や無生物がありますが、すべて素粒子からできているという点では同じなんです。これってふしぎじゃないですか？ さらにいえば、机やパソコンは「生きていない」といいますが、それらを構成する電子は、原子核のまわりをぐるぐるまわっているんです。これってほんとうに「生きていない」といえるのでしょうか？ 考えてみると、これもふしぎに思えてきますよね。

たかさんの本を読んできました。物理学や数学などを勉強していくと、疑問がそれなりに解決していきます。しかし、なにかがわかればわかるほど、次の疑問が浮かんでくるんです。次々に出てくる謎を考えつづけるのも、哲学なんですね。

私のイメージでは、「答え」は深海にあって、哲学者たちはその「答え」にタッチしようと息をとめて必死に潜っていきます。深海に到達してタッチする寸前まで行くのですが、ギリギリ触れることができずに水面に一気に戻されてしまう。そしてまた「答え」を求めて海に潜っていく……哲学って、これを繰り返すことだと思っています。

好きなこと

このような学問ですから、嫌になってしまうこともあります。気持ちがどーんと沈むときもあります。だって、なにも

10代とともに

わからないんですから。でも、私は謎が好きなんです。わからない問題を出題されて、それをひとりですーっと考えることが大好きなんです。学生時代に課題で出た問題集も、とにかく答えを見ることが嫌でした。人からものを教わることも嫌ですね。今でも、町にいる人に道を聞くこともできるだけたくありません。人に聞くくらいなら、道に迷って、とにかく自分で考えて前に進みたい。気分が沈むこともあります。謎を考えることがとにかく好きなので、哲学にむいている性格なんだと思っています。

おそらく謎は解決しないまま私の一生は終わるでしょう。でも、ずっと謎に挑戦し続けていくことが私の性格に合っているのだと思います。

そして、嫌いなこと

私がかつても嫌いなことばは「役に立

つ」ということばです。「誰かの役に立つ」なんてことばをよく耳にしますよね。でも、先程お話ししたように、そもそも人生の意味がわかっていないわけです。さらに、この宇宙がなぜ存在しているのかもわかっていないんです。ビッグバン以降、どのようにして今の宇宙になっているかは、ある程度わかっているかもしれませんが、そもそもなぜビッグバンが起きたのかということはわかっていないわけです。つまりこの世界はそもそも「意味のわからない世界」なんです。それなのに、「誰かの役に立つ」なんて、いかにも意味がありそうなことばだと思いませんか？「社会の役に立つ人になる」と決めたところで、そもそも社会がなぜ存在しているのかもわからないんですから。

なので、「役に立つ」なんてことは考えずに、誰かの迷惑にならないという前提のもと、みんな自由に、好きなことをし



て生きれば良いと思っています。まずは自分の好きなことを選ぶ。好きじゃなかったらやめる。そういうふう生きていくのがいいなと思います。

私は、謎やふしぎにむかって生きてきました。みなさんも、謎やふしぎにむかっていてほしいなと願っています。利益や有用性、まさに「何かに役に立つ」みたいなことだけで決まってしまうような考え方もありますが、そんなことはないと思います。疑問に思うことをたいせつにしてください。だって、そもそもぼくらがなぜここにいるのかも、わかっていないんですから。

(文責：編集部)

インタビューを終えて

[取材協力]

國分里美P(静岡県), 岸田智子P, 北谷美穂P(愛知県)

國分里美パーティ

●大場咲和(高2) お話は難しくもありましたが、先生の哲学者になる経緯や哲学への考えなどさまざまな話題が知れてとてもおもしろかったです。そして、先生のお話を聞いてでてきた疑問や新たな質問などにもていねいに答えてくれて楽しかったです。もともとあまり哲学には興味がありませんでしたが、お話にてきた哲学者を調べ、中村先生が出版されている本を読みたいと思いました。また機会がありましたらお話ししたいです。●大場愉以(大2)「将来を気にして今やりたいことをやるよりも、今好きなことを気にせずやれば良い」と言いきってくれるおとなは少ないの

で、話を聞いて良かったです。また、自分が気になった「なんで」をないがしろにせず、考え、調べ、話していくと、勉強になるだけでなく、自分の世界を広げるきっかけになることに気づけました。どんな質問にもしっかりと答えをもちながら話してくれて、聞いていておもしろかったです。

岸田智子パーティ

●田代優斗(大3) ホワイトヘッドの本を読んでみようと思いました。先生ご自身の興味を知ったうえで、先生の興味とラボの共通点を探っていきたいと思っていました。直接的に表現できないニュアンスの表現の仕方、方法論をアングラ演劇と哲学と

ラボとでそれぞれ比較しながら掘りさげることができたらよかったです。ことばの分解能以上の認識をできないという立場がおもしろかったです。直接的に表現しても伝わらないニュアンスの部分、哲学では概念を説明するというかたちで補い、ラボではことばや身体を使い、イメージや比喩を重ねることで達成しているのかなと思いました。理科系の批判的なものの見方で分析哲学の先生に質問したら違いが浮かびあがってくるかなと思、かなり踏み込んで質問してしまいましたが、おおらかに受け入れてくださった先生に感謝しています。

北谷美穂パーティ

●高濱心花(高1) 今回お話を聞いた中村先生は、今まで私が出会ったことのないタイプの人でした。考え方も私とは全然違って驚くところも多かったですが、違うからこそとても興味深いお話を聞くことができました。きっと中村先生の考え方や生きてきた道は少数派なんだと思います。でもまわりに流されず自分がふしぎに思ったことや興味のあることにためらうことなく挑戦してきた中村先生のように、私も自分の意思でやりたいことや気になったことにどんどん突きますんでいきたいです。貴重な体験ができて嬉しかったです。

[取材日] 2024年10月

驚きと感動が世界を彩る

向 敦史
会社員



高校3年生のときに、ラボの高校留学に参加しました。富山県に住んでいた私にとって留学は、世界に開かれた大きな窓で、世界がどこまでも広がっていることを感じさせるものでした。

私は今、「探究学舎」という会社で働いています。宇宙や元素、地球、アート、戦国時代、ことば、生命の進化……といったさまざまなテーマをとおして、世界の美しさやロマン、神秘や叡智と出会う教室を運営しています。いわゆる受験塾ではなく、テストや評価もありません。自分が興味のあるものを見つけたり、いろいろ自分と出会ったりする場所です。

私がとくに気に入っているのは、教材をつくる仕事です。教材づくりはまず、多くの情報にふれるところから始まります。本を何冊も読んだ



り、動画を見たり、人に会いに行ったり。するとあるとき、しぜんと涙が出たり、大きく息をのみ込んだりと、心震えるひと言や瞬間に出会います。

そのひとつが「相転移」でした。本を読んでいて、まず、地球の中が緑色の岩「かんらん岩」でできていることを知りました。実際に岩を買ってみると、緑のキラキラした岩が届きました。さらに驚くべきことに、かんらん岩は地中深くにいくと、温度と圧力で結晶構造が変わり、水色や青色、茶色の別の鉱物に変身していくのだと、専門家に教えてもらいました。こうした変化を相転移と呼んでいるそうです。緑色、水色、青色、茶色の、地球の美しく、ふしぎな姿に魅了され、とても興奮しながら教材をつくったら、その授業は大盛況。しばらく子どもたちの間で、「相転移」ということばがブームになりました。世界は知るに値する、驚きと感動に満ちあふれた場所です。私にとって教材づくりは、世界のなかから原石を見つけ、子どもたちにプレゼントするためにブリリアントカットを施す仕事です。



ラボの高校留学でも、驚きと感動に満ちた世界にたくさん出会いました。文化や言語の違いはもちろん、どこまでも続く丘陵地帯に沈む夕陽や、異国の友人たちと一緒にプレーしたバスケットボール、ミュージカルの名曲をみんなで歌う音楽の授業。そのどれもが新鮮で、高校生の私の心を揺さぶりました。そして、その時の瑞々しい感動をいっぱい吸いこんだ豊かな心が、今、働く土台になっていると感じています。

みなさんの心のなかにある驚きや感動が、きっと世界を拓いていきます。その感動をたいせつに！

むかい あつし＝株式会社探究学舎
教室事業部長 コンテンツクリエイター ファシリテーター
(富山県・松木明子パーティ OB)

Information

<国際友好親善事業>

- 海外からの青少年受入れプログラム
 - ・中国・上海外国語大学付属外国語学校(生徒7名、教師1名が来日予定)
日程：2024年12月22日⑩～2025年1月3日⑤
 - ・ニュージーランド(青少年25名、引率者2名が来日予定)
日程：2024年12月13日⑤～2025年1月4日④

<東京言語研究所>

- 公開講座
2025年3月16日⑩
講師：円城塔(小説家)
演題：未定
- 集中講義
2025年3月8日④・9日⑩
講師：藤田耕司(京都大学名誉教授)
演題：未定

- 理論言語学講座：2025年5月開講
要項掲載開始予定：2025年3月上旬
申込開始：3月下旬

※詳細については東京言語研究所
ウェブサイトに掲載します。
<https://www.tokyo-gengo.gr.jp/>